

高校スポーツ（運動部活動）を通したまちおこしの可能性

－富山県立氷見高校ハンドボール部の事例をもとに－

山口 智佳 （大分大学）

1. 問題関心および目的

2018（平成30）年度の高校男子ハンドボール競技において、富山県立氷見高校（以下「氷見高校」と略す）が3つの全国大会を制覇し三冠を達成したことが大きな話題になった。氷見高校ハンドボール部は名門であり、過去には1977～79年にかけて国民体育大会を三連覇している。なぜ、一県立高校である氷見高校ハンドボールは伝統的に強いのか、本研究の問題関心はそこに収斂される。

本研究においては、長年にわたる氷見高校ハンドボール部の活躍の歴史を踏まえつつ、高校スポーツ（以下「部活動」と略す）を通したまちおこしの実際を事例研究的に把握・解釈し、その意味（性）に関する社会学的考察を施すことを研究目的とした。

2. 研究方法

上記の問題関心に鑑み、氷見高校および氷見市におけるハンドボールの普及・強化に尽力されてきた（いる）関係者3名に対するインタビュー調査を実施した。調査は2018年12月20日に氷見高校をはじめとした各所で実施し、筆者の仮説にもとづき設定された質問内容に対して回答を願う「半構造化調査法」を基軸として行われた。3名の調査対象者へのインタビュー調査は各約1時間を要した。得られた会話内容については、回答者の理解を得た後、逐語録化し、分析・解釈データとして使用した。

3. 結果と考察（の概略）

インタビュー調査より得られた言説を分析および解釈するなかで見出すに至った知見は以下に集約できる。すなわち、1) 氷見高校ハンドボール部の強豪化（名門化）にあたっては、現顧問教師であるA氏の父親である「初代」顧問教師（B氏とする）の尽力が極めて大きく関係していること、2) B氏においては、氷見高校ハンドボール部の強化を直近に迫っていた地元開催の国民体育大会と「抱き合わせ」つつ、氷見市を「ハンドボールのまち」にすること

を意図し、自治体行政（教育行政）との緊密な関係構築に向けた動きを為した、3) 地元開催の国民体育大会ハンドボール会場となった氷見市において、氷見高校ハンドボール部は優勝を遂げる。そのことによって、「ハンドボールのまち」の気運は醸成されることとなった、4) B氏においては、氷見市内の中学校および小学校（スポーツ少年団等）へのハンドボール部設立に向けた動きを積極的に展開し、なおかつ、氷見高校卒業生によるOB（OG）組織の充実を図った、5) そのことは、B氏勇退後の氷見高校ハンドボール部における、その後の顧問教師たちによって継承されることとなり、強豪校（名門）としての地位を確立するに至った、のである。

当該事例——氷見市におけるハンドボール（部活動）を通したまちおこしの歴史的経緯からは、「志を有する教師（たち）の存在」なるキーワードを抽出することとなった。換言すれば、部活動なる教育活動は、対生徒にのみ向けられるものではなく、社会教育——スポーツを通したまちおこしのツールとしての意味と価値が存在しているのである。

4. 結論

本研究を通して、部活動に関与する教員の今日的役割論を見出すこととなった。「改革」の必要性に迫られている部活動が辿るべき方向性は、間違いなく「地域との有益な関係性の構築」となろう。生徒たちの充実したスポーツ活動の維持を意図した「ファシリテーター」的志向性の涵養こそが教員および教育行政には求められている、のではないかと。

5. 主な参考文献

- 1) 山口康雄ほか、スポーツと都市づくりと地域振興に関する研究、平成7年度文部科学省科学研究費研究成果報告書（神戸大学）、1996.
- 2) 谷口勇一、地方自治体スポーツ行政は部活動改革動向とどう向かい合っているのか、体育学研究、63（2）：853-870、2018.